福音の本質

（一九六五年三月二十一日内村鑑三記念講演会で）

藤澤武義

一

現在この世的に最大問題はベトナム紛争でありましょう。ご承知の通り、数年前からベトナムで度々クーデターが行われ、ことに昨年から戦争が続いて居り、次第に拡大していく傾向にあります。ベトナムの民は実に悲惨、気の毒です。キリスト教国・文明国・大国と誇るアメリカが何の必要があろう、あんな遠い所に軍隊を派遣し、ベトコンに攻撃を加えたりしました。中共とソ連は北ベトナムとベトコンを援助している。さる二月ベトコンが米軍基地など攻撃、そこで米国と南ベトナム軍が次々、報復で北爆。互に仕返し相い、また詰責し相い、米対中ソ間も。日本の基地にいた米軍艦や沖縄にいた米海兵隊が二回で七千も出動、中(ソ)の態度強硬であって、大戦争になりはしないかと全世界で、ことに平和愛好家、平和運動家によって大層心配されて居ります。

韓国からも二回で三千かが出兵しました。米国から日本に対し安保条約協議会の申入れあり、事情によっては自衛隊も出動するようになるでしょう。世は逆コースで紀元節復興の兆あり、防衛庁に三矢研究なるものがあって、その他政府や右翼のいろいろな動きを併せ考える時、軍備増強、対米協力などの傾向や気運があることは明かであります。もし日本も参戦するようになるなら、最初に出るのは航空自衛隊でしょう。その揚合中ソがそれを許すはずなく、さしずめ米子近くの美保その他航空基地が爆撃され、その近接地もやられることになりましょう。私たちはこれらの問題を真剣に考えねばなりません。そして極力、戦争と軍国主義化を防ぎ、平和の維持また達成のため尽力すべきであります。大部分の人々のように自分のことばかり考えて生きるならば、右の大目的を遂げることはできず、大戦となり日本も戦場となったり、再び帝国主義軍国主義化した時に、それこそ後悔先に立たずです。それなら問題解決の真の途は何か。

ベトナム紛争について言えば、米軍始め外国軍隊が早く撤退帰国すること。殊に聖なる神の前に、互に他を責めることを止め、自らの非を知り、真にその罪を悔改め相手に対しても謝罪し、悔改めの実を結ぶことです。言葉でだけでなく、損害賠償することが大切。個人の場合も同様、このようにすることにより、真に争い戦いを止めて平和を来らせ得るのです。米国はキリスト教国を看板にしているだけに、速かにかく悔い改めて、その実を結ぶべきです。そして他の国、相手側もかく罪を悔改めることが大切です。喧嘩両成敗だからです。

二

個人の問題でも、国際間の問題でも、この争い事を初め、大部分の難問題は帰するところ罪の問題であります。それは聖書の思想でありまして、聖書をよく読んだ人なら誰でもすぐ気付くことであります。凡ゆる道徳的犯罪を始め、諸種の悪事、今非常に困った大問題なる交通事故の大部分なども結局は罪の問題なんであります。ことに戦争は特別そうであっ

て、戦争ほど大罪悪はありません。全てこれらの難問題の根本原因を為すものが罪であり、又その問題の事柄の過程や遂行に罪が伴っているのであります。

故にこれらの難問題の解決は罪の解決にあります。すなわち問題の原因であり、またそれに伴う罪を除去するにあります。それにはどうすればよいか、これまた非常に困難な事ですが、聖書的思想と観察により、己が罪を知り、神の前に、キリストの十字架を仰いで、その罪を悔改め、そして赦され、復活の主に在りて義とされ、更に聖霊の力によって罪に勝つ者とされ、聖書の教え、すなわちキリストの訓命・キリスト教道徳を主に在りて実行することであります。

キリスト教は　これを教え、説き、また要求しております。それは全聖書に記してあり、特に新約聖書に強く説いてあります。その中ロマ書(口語訳「ローマ人への手紙」の略、以下同)はその最たるものであります。ロマ書はキリスト教が何であるかを系統立て、順序を追うて詳しく説き記したものであって、キリスト教がどういう宗教であるかを知る上に一番大切な書物であります。同書はキリストの最大の弟子パウロによって書かれたもの、パウロの最大著作であります。詩人コレリッヂ曰く「かつて書かれた書物の中で、ロマ書は最大の書物である」と。内村先生は言説せられました。

『まことにロマ書を解し得る人は世界最大の書を解し得るのである。ミルトンの「失楽園」、ダンテの「神曲」、共にロマ書ほど大なる書ではない。ロマ書を解し得る者はキリスト教を解し得る者である。キリスト教の生粋はロマ書にある。ロマ書をわが書として読み得るに至って、われらは福音の奥義に達し得たのである。』と（内村全集第六巻）。実に至言であります。

三

ここでロマ書の内容（項目）を概観してみましょう。

第一章1ー17、初めの挨拶と前おき（緒言）。

第一章18ー第一五章13、本論

一・18ー三・20、罪の問題（罪の指摘）。

三・21ー七・25、罪の解決の途（罪の徐去）。

八全体、救いの完成（個人的）、絶対的勝利の凱歌。

九ー一一、ユダヤ人の運命と全人類の救い。

一二・1ー一五・13、信者の道徳。

第一五章14ー第一六章終、終りの挨拶など。

この中、先ず重要なのが、罪の解決、罪を取除く途、すなわち罪を赦されて義とされる途であります。その中心論（幾分緒論）が説いてある所が第三章21ー28であり、そこに神の義の現れが説いてあります。すなわちキリストの十字架の死と復活とに於て、神の義が現れたのであり、己が罪を悔改めて、このキリストを信ずる人は全ての罪を赦されて、義とされ救われることを説いたものであります。この教説この真理により、著名なアウグスチンもルターもバンヤンも内村先生も徹底的な悔改めを経験し、キリストの救いを受けられるに至ったのであります。全てのキリスト信者は絶対にこの経験を必要とします。

人間はアダム以来、神に反逆して罪に沈み、その結果、死に且つ亡ばねばならぬようになったのであり、父なる神はそれを憐んで、その無限の愛を以てわれらの罪を赦し、われらを義としてその聖国に救うの途を開き給うたのです。すなわち父なる神の無限の恩恵の示現として、神の義が現れたのであり、それを受ける人間の側に必要なものは信仰であります。

読者は前記の聖句を味読せられたい。その28節は

「というのは、われらは思う、人が義とされるのは、律法の行為によらないで、信仰によるからである。」

この末句の「信仰による」をルターが「信仰だけによる」"allein durch den Glauben"と快訳したことは有名。このallein（だけ)を附けたのは、原文に照らして余分であって、それは過誤だとカトリックでは攻撃しているけれども、福音の本質から言って真理なのであります。

この場合の信仰とは、神または奇蹟を信ずるという場合などの信仰とは違います。神を信ずるという信仰は、神の存在を信ずる、または神に信頼するという意味のものであります。それに反し、「信仰によって義とされる」という時の信仰は、主イエスの十字架と復活に神の義が現れた事を信ずると共に、その義を信受することであります。父なる神からの天与大恩恵の賜ものとして、大なる感謝と喜びとを以て信じて拝受することです。欲しくても、疑うなら自分のものとすることはできません。来客がおみやげに出されたおいしい鰻頭を、腐ってるとか毒が入ってやしないかと疑って、頂かないならその美味に与ることができないのと同じです。

これでわかる通り、罪を赦されて義とされるのは信仰によるだけで、他のどんな方法にもよらない。学問も富も地位権勢も名誉も体力武力も享楽もこの事だけには絶対無力です。この義とされる為に信仰以外の方法で一番重要なものは、一般常識的には道徳的行為だと思われますが、聖書的には律法の行いです。　それは二大別され、宗教的態度（儀式）と道徳行為の二つです。真の信仰は自然に善行、道徳を生むもので、信者は次第に善行ことに聖愛を実行すべきですが、本来行為道徳によっては義とされない、すなわち聖なる神の前に真に潔く義しく生きることは人間の力では出来ないのです。やってみれば判ります。古来聖徒たちが試みて皆失敗しました。自分の行為によって義たらんとして、人によってはその為に難業苦行もしたけれど不可能なるを知り大層苦悩しました。ロマ書七章に述懐してある通りパウロを始め、前記有名人大先輩皆そうでした。たとえ一見、外形上行った如く見えても、すべての場合、言葉ことに心が伴わなくてはならない。神はそれを要求し給う。そこで「私は罪人の頭だ」（テモテⅠ一15）とはパウロに限らず誰もの述懐です。そして宗教の儀式も一種の行為であり、儀式という行為によって義とされないのは、右と同様で、言う迄もないこと。教会で重んずる洗礼・聖餐・按手等の儀式によって義とされはしない。義とされ救われる為には一切そんな儀式など無くてもよく、否、無い方がよく、無いのが純信仰なのです。

四

この信仰だけで一切の罪を赦されて義と認められ、義とされるとは、父なる神また主イエス・キリストの絶大無限の恩恵とご愛によることでありまして、何たる感謝、何という有難い勿体ないことでありましょう。先に見た通りかく義とされて至聖の神との平和・霊交に入り、神の国に救われる為には、一切の行為ーどんな徳行も壮厳な宗教儀式なる行いも何ら役に立たず、教会に入るという行動も無効なのです。すなわち義とされる為には教会は無関係なのです。この原則上、救いは教会の外にある。これに反し、徳行また宗教儀式や教会加入など善行によって義たらんとするのはーそれは実際は聖なる神の前に絶対に出来ないことですがーかのパリサイ人の如く神の聖前に己が義を立て誇ろうとすることであり（ルカ一八11ー12）、憎むべき偽善と高慢になるのです。

誰も生来のまま、罪のままでは聖なる神の前に立つことができないけれど、かくイエス・キリストを信ずる信仰だけで一切の罪を赦されて神の聖前に立ち、この天父との平和な楽しい霊交に入らして頂くのです。この場合、神と自分との間にはキリスト・イエスが入って執成し給う、それだけで必要にして充分であって、他の何者の介入も必要でない、また出来もしない（ヘブル一〇19、20、その前後等参照）、すなわち神とキリスト者との間には教会も牧師も監督も、神父も法王も無用であり不要なのです。かくの如きが福音の本質、キリスト教の根本原理です。これ新約、広く全聖書を精読するなら誰人にも明らか真理であり、殊にロマ書・ガラテヤ書・ヘブル書・ヨハネ書翰等の強き教説です。

五

しかるに教会ことにカトリックでは、そう言わず、教会また教会加入も洗礼も聖餐も按手礼なども必要だと言います。しかし聖書のどこにそういうことが書いてありますか。

普通一番問題になる所がマタイ伝第十六章一七ー一九で、全ての教会ことにカトリック教会が拠って立つ所の根拠としている最も重要な個所です。カトリックは言いますー

「ペテロは晩年にローマに来て伝道した。そして教会が建設された、それがローマカトリック教会である。そしてイエスが『この岩の上にわが教会を建てる』と仰せられた「岩」とはペテロ個人を指すのであり、主はペテロの上に教会を建てると言われたのだ。故にこのローマ教会こそイエスによって建てられた唯一の教会である。しかしてこの教会を代表する者が法王であり、次いで枢機卿や神父等である。天国の鍵はイエスによってペテロに授けられ、歴代のローマ法王が受け継いでいる。故にカトリック教会と法王、また神父によらなければ誰も天国に行けない。宗教改革のルターは地獄行きだ、ローマカトリック以外のどの教会も真正の教会でなく、プロテスタント諸教会などには救いはないのだ」と。

この主張に対して誰がどの程度反駁できますか。かく言葉巧みに言われると本当にそのような気がしませんか。カト教会が大きな立派な会堂を擁して居り目に見える世的な事業もやっていて、かく強く主張すると多くの人が心を動かされる。殊に聖書にはちゃんと「教会」と書いてある。されば無教会信仰とか無教会主義とか言うのは誤りではないか。

ノー!!、伝説によればペテロも晩年ローマに行って伝道したと言われる。有名な「クオ ヴァディス」は小説として書かれているけれど彼のローマ行きの事実に基づくものでありましょう。それはよいとして、しかし彼より先にパウロが事実ローマに行き、捕囚中も釈放された後も長年間伝道したのです。先程見たロマ書も当時世界一の強大ロマ帝国の（現イタリヤ）首都ローマにいたキリスト信者の為に多分紀元五七年頃コリントでパウロが書いた物であって、そのことから判明する通り、パウロがこれを書く前からローマの信者中彼と交わりを持っていた、すなわち彼の伝道によって入信したり信仰を導かれた信者が何人かあったのです。そして本書や使徒行伝で判る通り、彼は多年ローマ行き、ローマ伝道を熱願切禱していて、それが不思議な摂理によって導かれ、使徒行伝二八章に記してあるように、捕囚の身であったがローマに行き（六〇年頃、早いのは五七年という説もある）そのまま満二年間（30節）伝道したのです。そして釈放後も伝道し、伝説によれば六五年（前後）頃暴君ネロの迫害で殉教の死を遂げたのです。そしてペテロが何年頃ローマに行ったかは明白ではないが、パウロよりはずっと後であることは明かで、多分六三年か四年、そしてパウロと大体同じ年頃殉教したのです。故に ローマ教会を誰が建てたかというなら、勿論パウロであって、ペテロではない訳です。

しかも紀元一ー三世紀には、今日言うような組織をもった教会は出来ていないで、組織・制度をもった可見的な教会ができたのは四ー五世紀頃からです。その点からもカトリックの言うペテロがローマ教会を建てたという説は誤りです。ローマで制度的可見的教会ができたのは、四世紀にコンスタンチン帝がキリスト教を国教とする政策を執り、政治的経済的に保護し助成したので帝国版図内にキリスト教が普及するようになってからであります（その点、皇室の保護によって日本仏教が普及したのと似て居りしかも共に堕落の原因）。

故に、またロマ書中に（一六5、23その他に）数回出ている「・・・の家の教会」とあるのは（なおコリントⅠ一六19、コロサイ四15、ビレモン2等々）信者の家を会場として日曜などに集会していたことを物語るものであって、制度的な教会でなかったことは明らかです。また普通「教会」の語は会堂（特殊な建物）をも意味して用いられているが、前記の通り、そういう教会は当時まだ無かったのです。

しかも日本語で「教会」（英「チャーチ」、独「キルヘ」）と訳された原語「エクレーシア」は（語原的には「エク」（…から）と「カレオー」（呼ぶ、呼び出す）との複合詞で）本来、「召集」「集会」という意味です。二、三人でも集まれば、それがエクレーシアです（マタイ一八20参照）。この一般的エクレーシアがキリスト教に採用され、キリスト教的信仰的意味を含めて用いられるようになったのです。そしてそれが次第に、実際に体を以てある一定の具体的な場所に集まるのでなくても、信者の団体をエクレーシアと言うようになり、更に目に見えない信者の魂の団体（ヨハネ伝一五章等に説いてある通りキリストを幹また頭として信者全体は霊的に有機的に結合した一大霊的有機体）を指し、しかも現在だけでなく、過去から未来永久に亘り全世界の全ての信者のそうした霊的団体の意味をも含めて用いてあり、少くともエペソ書やビリピ書等にあるエクレーシアはそういう霊的な深い広大な意味であることは明らかでこれを教会と訳すことは誤りです。

次にこのマタイ一六章一八に協会訳にはイエス様の言として「…あなたはペテロである。…わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。…」とあり、カトリックでは、この「岩」とはペテロを指し、イエス様はペテロ(個人)の上に教会を建てると仰せられたのだとするのですが、これまた得手勝手な独断論で、甚だ不適正です。カトリックの根拠としてペテロと岩の原語が同じだから、というのです。しかし原語ギリシャ語ではペテロは「ペトロス Petros」(男性)、岩は「ペトラ Petra」(女性)であって両者は違うのです。殊に男性、女性の違いは大きいと言わねばなりません。

更にカトリックでは、当時イエスや使徒たちが、ギリシャ語でなく、アラミ語を使って居られたと主張し、アラミ語では右の両者が同じ「ケファ」だからペテロ個人の上に教会が建てられた、それがカトリックだというのです。しかし果してかく断言できるかどうか。イエス様と使徒の用語のギリシャ語説とアラミ語説は甲論乙駁、もちろんアラミ語使用は間違いないとして、ギ語も事実使用されていたのです。

たとえ全然アラミ語だけだったとしても、ペテロ個人の上に教会を建てることが果して可能であるかどうか、且つそれが真にイエス様のみ意であったかどうか問題です。

前号で見た通り、もしローマで誰かの伝道によって教会が建設されたというなら、それはペテロよりもパウロによってであると言わねばならない。そして伝道者の働きと信者の協力によって教会は出来るのではあるが、誰か一個人 ― それがいかに偉大な伝道者であろうともその人 ― の上に教会を建てるということがどうして出来ますか。普通「教会」という語は目に見える教会の会堂を指すのですが、一個人の上にそういう教会を建て得ないことは言うまでもない。また目に見えない団体とかの教会を指すという方便論を認めるとしても、一個人の上にいかにしてそれを建てられるのか。教会者は何とか都合のよいこじつけ論をするでしょうが不適正です。

殊に特定のペテロ個人の上に真のイエス・キリストの教会を建てるということが、果して主イエスの御真意であったでしょうか。一八、一九両節が後世の加筆だと言われていることは暫く措き、一六節のペテロの信仰告白を主が大層お喜びになったことは事実でしょうが、次段二一節以下に於て、次第にその時期が近づいて来たので、弟子たちに知らせておく必要あり、主が彼等にご自身が近くエルサレムで十字架につけられ殺される（且つ三日目に甦るべき）ことをお告げになるや「ペテロは主をわきへ引き寄せて、いさめ始め『主よ、とんでもないこと、そんなことがあなたにあろう筈はないです』と言った」。これは彼の信仰がまだ肉的この世的で低劣であり、真の福音的キリスト信仰でなかったことを示すものです。故に主は「振り向いてペテロに『あっちへ行け、サタン。お前はわたしの躓きだ、神のことを思わず、人間のことを思っているからだ』と言われた」。先の立派な信仰告白をして十分もたつかたたずに、嘉信麗言を発表してまだその舌の根の乾かない内に、この肉的低劣な謬信を暴露し、主イエスから悪魔呼ばわりで叱責されたペテロ個人の上に主の教会を建てるというような愚かなことを、賢明透徹の神の独り子キリスト・イエスがなさるでしょうか。

そればかりでなく、彼ペテロは弟子団の頭分だとされていたのに、ゲッセマネの園で十字架受難を前にして、主が血のし

たたりのように汗して熱藤せられ、「目をさましておれ」と命ぜられ、特に彼にだけ詰問もされたのに、三回も眠りこけたのです（マタイ二六36－45、マルコ一四32－42、ルカ二二39－46）。また彼は主の前に力をこめて「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」とか（マタイ二六35、マルコ一四31）、「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」とか（ルカ二二33）、「主よ、なぜ、あなたについて行くことができないのですか、あなたの為には命も捨てます」とか（ヨハネ一三37）強い壮語を言ったけれど、主が捕われ給うや、彼は他の弟子と一緒に「イエスを見捨てて逃げ去った」し（マタイ二六56）、更に（「鶏が泣く前に君は三度わたしを知らないと言うだろう」と主が予言し給うた〈マタイ二六34、マルコ一四30、ルカ二二34〉通りに）イエス様が大祭司の所に曳かれ裁判されなさるに当り、彼は三回もイエスを知らないと虚言を主張したのです（マタイ二六69－75、マルコ一四66－72、ルカ二二54－61、ヨハネ一八15－27）。その他あげれば、まだいろいろありますが、こういう、しかも致命的というべき失敗だらけのペテロ個人の上

にキリストの聖なる教会を建ててよいものか、又主イエスにそれをお建てになる聖意が真にあったでしょうか、それを考え得るでしょうか。

六

次に五にも記した如く、カトリックでは　この十八、九節により、主がペテロに天国の鍵をお授けになった、そしてペテロがロマ・カトリック教会を建てたのであり、ロマ法王＝教皇はペテロの後継者（歴代）であって、ペテロに授けられた天国の鍵は法王＝教皇が続いて承継しており、どんな人もロマ教会に入り、法王＝教皇（またその代理者とされる神父）の指導を受け同教会で規定している法王＝教皇また神父等による儀式行事に与らなければ天国に救われないというのですが、これまた全く不当な暴論です。

一体「天国の鍵」とはどんな物か、又そんな物が実際あるでしょうか。ここに鍵とは戸締り用の物質の鍵でないことは明らか、その他いろいろ想像して或る程度説明できないこともないが、福音の本質上何か変な話で、疑わしいのです。

たとえ事実、天国の鍵なるものがあるとしても、右に見た通り、熱し易く冷め易く、熱した時にはすばらしい証示をする反面、急冷してあんな誤信を露呈して悪魔呼ばわり叱責されたり、真相は空元気で度々とんだ大失態を演じた彼ペテロに、天国行きの為に必要不可欠な貴重品と見なされている鍵を授けてよいでしょうか。論者はあるいは、前半期のペテロはそういう失敗をしたけれど、主の復活後の後期のペテロは福音的真信仰に堅立して非凡の大活躍をしたのであって、この後期ペテロに対してこの十八、九節の信言を以てあの特権を授与せられたのだと言うかも知れません。なるほど一理ある考え方ではあるが、為にせんとするこじつけ論というもの。そして当時の使徒弟子の中、誰が一番偉く、一番大伝道したか、それぞれ長所短所あり、何れ劣らず、兄たり難く弟たり難しでしょうが、先に見た通りローマ伝道に於ても彼よりもパウ

ロの功労が大きかったのでありますし、後期、真信仰に堅立していたはずのペテロも、福音の把握の仕方、その深さに於て欠けていた点あり（公衆の面前に於てパウロから指摘かつ叱正されたほどです。ガラテヤ二11－14等）更にその伝道全体の深大にして広範囲、又は長年間だったこと、殊に後年にもキリスト教全体に及ぼした影響と聖書に於ける功績と地位などに於て、ペテロよりも、パウロやヨハネが優大であったことは（詳しくキリスト教の本質と歴史、聖書の内容を知るなら）争う余地のない事実でありませんか。

されば キリストが真にその教会をお建てになるに当って誰の上にせられるべきか、また天国の鍵を誰にお授けになるべきかと言うなら、ペテロよりもパウロを、次にはヨハネを選ばれるべきは明らかではありませんか。

故に、またカトリックでローマ法王（教皇）はペテロの後継者であり、授けられた天国の鍵は法王に受け継がれている云々という説は真の根拠のない、大変飛躍した暴論なること、何びとも認めざるを得ないではありませんか。

以上により推察される如く前記両節は何か福音の本質と純信仰から外れて居り、どうもイエス様の真の発言ではないように判断されるではありませんか。以上諸点につきルター、エラスムス、カルヴィン、カイム、ホルツマン、ダイスマン等の学者も同似の論説であり、更に右両節は後世の加筆であることも論証されつつあるのです。されば カトの所説は転覆、その立場は崩壊したと言わねばなりますまい。

しかして前号で見た通り、聖書上「教会」と訳された原語エクレーシアは召集また集会、信徒の具体的集会、更に霊的集団を意味するものであり、少くとも制度的可見的のいわゆる教会を意味しない以上、そして一般に人々が「教会」と言う時それは可見的教会しかも大部分はその会堂を指して言っているのでありまして、福音の本質上、原語エクレーシアを聖書や信仰書に「教会」と邦訳するのは誤りだと私は主張するのであり、然りとすれば、カトリック（広くは一般に教会）の言い分は不適正と言わねばなりません。

しかも前記の如くカト教会はローマ帝国の護助を受け、教会主義的発達をとげ、教会と教職の権限を強化、それに服しない者を圧迫し、次第に異端的となり大堕落し、不埒なる赦罪券なる物をも販売したのです。そこでルター奮起し一五一七年十月三十一日ヴィッテンベルグ城教会の扉に、かの九十五箇条を掲出、宗教改革の火蓋が切っておとされたのです。

七

続いてこの宗教改革の問題にもふれたいですが都合上割愛し、前述しましたカトリック教会等の根拠としているマタイ伝一六章一七－一九について、その解釈や主張が過誤であるなら、それをいかに解すべきか学んでみましょう。ただ、先に見ました一八節後半ことに一九節が後世の加筆であるなら、また加筆云々は第二としても、カトリックの言説が得手勝手な暴論である以上、それを取上げる余地なく、ここで一応除外しておき、特に一八節前半の主イエスの言「君はペテロだ。　この岩の上に、わたしの集会を、わたしは建てる」について一言しておきましょう（前述の通り、原語エクレシアを「教会」と邦訳するのは誤とすべきで「集会」と訳す）。カトリックの解釈が誤なら、これをいかに解すべきか。

前述の通り「ペテロ＝ペトロス」は「岩」という意味であり、右の聖言に於けるイエス様のご意図はこうでしょう。

「君はペトロスだ、その名の通り岩のような人物、堅固な信仰の勇士となるのだ。そうです、ここで特に『岩』とは君という人間よりも、君が今言い表した（16節の言の）信仰を指すのです。すなわち君はわたしのことを『あなたはキリスト、生ける神のみ子です』と言った。それはすばらしい立派な貴重な信仰の告白です。キリスト教はこの信仰の上に立つ。キリスト教が、また信者各人と信仰内容や信仰生活が、この信仰の上に立つ以上キリスト教と信者の信仰またその生活は微動だにしない ― たとえどんな波風にさらされても。すなわち君が告白した信仰は岩の信仰、金輪際に根ざす盤石の信仰です。どうか君自身この岩の信仰をいつ迄も堅持してほしい、またわがキリスト教わが福音が未来永久に、またどんな時にもこの盤石の信仰の上に強くキツ(屹)立するようにしっかり伝道してほしい。また人間はどんな立派な人物でも、聖なる神の前に罪深くして死に且つ地獄に落ち滅ばねばならないのだが、この信仰に生きるなら、一切の罪を赦され、義とされ、永遠の命を与えられて死を征服し、また地獄・滅亡に勝って天国の救に入れるのです。この信仰はかく貴重至極・肝要な信仰です。またキリスト教なりキリスト福音、またキリスト信仰の根本であり中心をなす所の大真理です。

すべて真理は単純である、という通り、この信仰の大真理も、このように簡短に（マルコやルカに於てはまだ短く）表現できるのであり、その意を容易に解し得る簡単なもののように思える。ある意味で、どんな無学者でも老幼病者でも悟得できるやさしい真理です。しかしこれを別の面から眺めると、どんな大学者や智者才覚者も理解することができないむつかしい大真理なのです。人間的にいかに努力して研究しても、いかに偉い大学者、大教師に教えて貰っても、一切人間によってこれを解悟することはできない。すなわち（17節にある通り）これを真に示すことができるものは、血肉ではない、天の父なる神だけだ、天父が聖霊によって示し給うのによって悟るのです（第一コリント一二3）。かく天父に示されて、この大真理を悟る者、更にこれを告白する人は真に幸だ。バルヨナ「ヨナの子の」シモン(ペテロの元の名)〔ペテロと言わず、かく言われたことに注意必要〕、君はその第一人者、最初の幸福人だ、感謝極まりなしだ（誰でもこの信仰を持ち得たら一番幸、これを告白するなら更に幸）。

君が、この一番大切な大真理の信仰を悟得することができ、更にこれを告白してくれ、感謝と喜びに溢れる。そこでわたしもその感謝と喜びを以て言うのだが、君が今告白した大真理、わがキリスト教わが福音の基盤を為す盤石の信仰の上にわたしの集会＝エクレシヤをわたしは建てるのだ。組織や制度による教会・神父だ牧師だなどという教職者が居り洗礼や聖餐などの儀式を重んじ特殊な建物と飾り物を持つ会堂によって代表され、未信者にもすぐ連想される教会ではなくて、真に父なる神と御子キリストと聖霊の内在するイエス・キリストの集会＝エクレシア（時間空間を超えて全てのキリスト者の魂の団体、救主キリストを頭とし又根幹とする有機的霊的一大結合体）こそは、この信仰を盤石の基盤としてのみその上に堅立する。わたしはその基盤の上に建てるのだ。

そしてこの信仰に生き、この集会に入った人は罪と死に勝ち、悪魔と陰府や地獄にも勝ち、義と永遠の命と天国の救と

光栄を与えられるのです。「そこに完全絶対永久の勝利あり」と。実に感謝極まりなし、福音の本質はそこにあるのです。これに与る人は真に幸です。

八

先に見た通り、ルターはロマ書講義において信仰だけで義とされ救われることを説き、中世ロマ・カトリック教会の極端な堕落の最中、摂理のみ手に導かれて、宗教改革ののろし（蜂火）をあげ、その大立物となり、福音の本質真理のため命がけの抵抗を貫徹し、一応その大成功・勝利を獲得しました。そしてその牧したウィッテンベルグ城教会々員を始め、その周辺、更に殆ど全ドイツに亘り、何百また何千という信者が、カトリックを離れて、彼により改革された新しいキリスト教、いな旧来の本質に立つ福音的キリスト教に転宗向上し、いわゆるプロテスタントとなりました。

しかしルターは、この多数の同信徒をいかに導き牧すべきかについて名案も原理も定説もなく、迷い、充分思索や研究をする余裕なく、カトリック教会にならい、組織と制度を持つプロテスタント教会を作ったのです。教会制度、その教職を立て、サクラメント（「秘跡」ーカトリック訳語。「聖礼典」ープロテスタント訳語）として洗礼、聖餐の二礼典を定めました（カトリックには七秘跡あり、右の外、懺悔式・堅信礼・婚姻礼・終油礼・任職式。ルターはカトリックの七分の二を採用。なお後世右二札典の外、按手礼を行う教会多し、尤もこれを礼典と見ない教会もある）。

彼はこの二礼典を必要としたのです。そして聖餐論で彼とスイスの改革者ツウィングリが対立、特に一五二九年マールブルクで論争したことは有名。聖餐式のパンと葡萄酒の中に、それと共に、キリストの体と血が実在する と彼が主張した（実在説また共在説）に対し、後者はそんなはずはない、それは象徴に過ぎないと強調し（象徴説）、両者が一歩も譲らなかった。ひいき目に見ても、冷静公平に言ってルターに賛成し得ません。彼はロマ書、ガラテヤ書広く全聖書により、信仰だけで義とされるという福音の本義を闡明し決死の働きで宗教改革の鴻業を成し遂げた最大功労者でありました（その点彼を尊敬するのにやぶさかではありません）が、信仰だけ で義とされるという福音の本質・根本義・原則から当然言えることは前述の通り、道徳または宗教儀式など行いによっては義とされず、主の救いに入る為には洗礼や聖餐の儀式・教会加入の行為も、神と人の間に教会諸教職の介入も無用だの に、ルターが教会と制度を作ったことは矛盾であり宗教改革は不徹底だった訳です。それ故「宗教改革は不徹底に終った」と内村艦三先生は堂々と強く唱えたのです、度々。

ルターがカトリックにプロテストして改革し作ったルーテル教会は間もなく全ドイツや北欧諸国に普及し、次第に全世界に広まったが、初期にはプロテスタント教会として福音的適正さを相当持っていたのに（それも前記の通りプロテスタント主義と矛盾する制度上の不純さがあった）、次第に教会主義強化、近世では非常に制度的形成主義に堕して了いました。他のプロテスタント諸教会も五十歩百歩と概観されます。

（一九六五年六ー一〇、一一月、一九六六年一、二月号）ー

福音の本質から言えばこれではいけないのです。内村先生はプロテスタント主義をその当然の結論に持ってゆけば無教会主義となることを度々唱えました。この主義＝福音の本義原則は教会的諸制度（その設定、教職教権、諸儀式）を拒むものです。内村先生のそれらの言葉は実に強力です（それを紹介したく全集の中から沢山拾い用意したが、時間ー紙面の不足で割愛）。そしてこの本義本質から言って、プロテスタントー新教諸教会は大過誤を犯している、しかも世界的概観に於てキリスト教は教会によって代表されているのです。そこで内村先生は第二の宗教改革の必要も度々唱え、且つその改革の任はわが日本に委ねられるよう希うと説きました。そして日本無教会が起りました。イエスやパウロも無教会主義者であり、リンカーンやキルケゴールも無教会信者、他にもありますが、世界で最初に論説として無教会（主義）を唱えた人は内村先生です。そして日本無教会によって第二の宗教改革が行われつつあります。無教会にこそ本質に立つ福音の本流と生命が流れているのです。その本流・命は主イエス↓パウロ↓ルター↓内村艦三、否、徹言せば、主↓パウロ↓内村、と伝わったのです。実に神の聖業、奇しき摂理!!、罪深く亡ぶべき者が信仰だけで義とされるとは何たる感謝でしょう。

福音の本質は、神第一に、そして信仰だけの信仰に生きることを要求します（知識や富や権勢や享楽等でない）。無教会はかく生きつつあります。併しまだ未熟、色々欠点あり、福音的信仰は再臨・復活・天国を熱望し、善行愛他、熱心な聖書読み・祈りと伝道を生むのです。

ー第一八三、一八七、一八八、一九〇、一九一号